

モンゴル・ウランバートル市のゲル集落の拡大

小金澤孝昭*・ジャンチブ・エルデネ・ブルガン・*佐々木 達**

Enlargement of Ger Settlement around Ulaanbaatar City in Mogolia

Takaaki KOGANEZAWA, Jantive Erudne Burugan and Toru SASAKI

要旨 : モンゴルや中国内モンゴル自治区では、草原の荒廃が進み、砂漠化や黄砂発生の原因となっている。草原の荒廃の要因は、中国内モンゴルでは、商品経済の浸透に伴う家畜の過放牧である。他方モンゴルの草原地域では、遊牧民の減少も草原の荒廃の要因となっている。この研究では、モンゴル国ウランバートル市で進んでいる遊牧民の流入に伴う都市拡大の実態を検討した。牧民たちは市街地周辺の丘陵地に無計画にゲル集落を形成し、生活インフラ未整備による衛生問題や冬季の石炭使用による大気汚染の要因となっている。牧民たちの流入の理由は、子どもたちへの教育機会を与えるためが多かったが、他方で牧民たちの都市の居住拠点の形成も大きな理由となっている。

キーワード : ゲル集落、移民、都市問題、砂漠化、スラム化

1. はじめに

モンゴルは、中国内モンゴル自治区と同様に草原地域の荒廃が進み、砂漠化や黄砂を生み出している地域である。中国内モンゴル自治区の草原の荒廃は、中国政府の定住化政策と牧民の商品経済の下での家畜の過放牧が大きな要因となっている(小金澤, 2006)。こうした現実に対して中国政府は退耕還林・還草政策や禁牧政策などの環境政策を打ち出している。これらの政策には問題があるものの、一定の成果を挙げているのも事実である。他方、モンゴルの草原の荒廃に対しては、各国からの援助政策や植林ボランティアによる援助などが行われているが、十分な環境政策は実施されていない。なぜならば、この原因が一部地域では家畜の過放牧であり、一部では牧民の草原地域からの流出に伴う草原利用の粗放化であるというように、その解決のためには、土地利用規制のような環境政策だけでなく人口移動を調整する社会政策による対応まで求められるためである。そのため、総合的な環境政策が打ち出せないでいるのが実情である。草原の劣化の要

因である牧民の牧畜経営については、今後の調査に譲り、本研究では草原からの人口移動の実態について、都市の側から検討することにした。牧民の都市への流入は、もちろん草原から移動せざるを得ない理由と都市が移民をひきつける魅力との両面から検討される問題である。しかし、今回は調査期間の制限から、都市に流入する移民の生活実態を明らかにして、モンゴルの人口移動の調査研究の課題を整理することとした。実態調査は、2006年の3月の冬の終わりと9月の秋の2回行った。報告の構成としては、2で統計資料を使ってモンゴルの首都ウランバートルの都市化、牧民の流入地域であるゲル集落の拡大状況を整理した。3では、3月と9月の調査を基にしたウランバートルのゲル集落の生活実態と9月に行ったゲル集落の住民調査から、移住の理由を整理した。これらの実態調査は、体系的な社会調査ではなく、個別ヒアリングの範囲にとどまっている。そのため、ここから整理される実態は限定的なものである。

*宮城教育大学社会科教育講座, **宮城教育大学研究生, ***宮城教育大学大学院生

2. モンゴル・ウランバートルの都市化

1) ウランバートルの都市特性

ウランバートルは、モンゴル国の首都で、都市の位置はモンゴル国のほぼ中央部にあり、標高は約 1500m である。モンゴルの人口は 264.6 万人 (2005 年) で、国土面積は 156.7 万 km² (約日本の 4 倍) ある。政治体制は、1989 年からの民主化運動が活発になり、1992 年 2 月に新憲法が発効し、国名をモンゴル人民共和国からモンゴル国に改称した。首都ウランバートルは、政治経済の中心でモンゴル第一の人口を擁する都市である。ウランバートル市は、図 1 のように山間地域の谷筋に発達した都市である。

市街地は Tuul Gol 川の北側の平坦地に形成された。人口増加とともに市街地は川沿いの平坦地の東西に拡大していった。近年の人口増加によるゲル集落は、地図上の市街地の北側の丘陵地を駆け上がるように拡大している。標高 1500m のウランバートルの気候条件は、年間降水量 281.8mm で降水量は少なく、降水

量は冬季の降雪に依存している。図 2 は、ウランバートル市の年間平均気温を 1941 年～ 2003 年まで示したものである。2003 年の資料では、最高気温は 33.0 度、最低気温は -34.2 度を示すが、平均気温は -0.3 度となっている。60 年の平均気温の変化をみると、確実に平均気温が上昇していることがわかる。1941 年には、最高気温が 33.6 度、最低気温が -41.9 度であり、平均気温は -3.4 度を示していた。1961 年まで最低気温が -40 度以下であったものが、それ以降 -30 度台に上昇している。この変化は、地球温暖化も含めてさまざまな要因が考えられるが、現象としては確実にウランバートル市においては温暖化している。特に最近の人口増加に伴う、冬季暖房の増加の影響で都市自体が温まり始めているのも一因である。

2006 年 1 月現在、ウランバートル市の人口は 92.5 万と発表されている。しかし、最近では後述するように草原地域からの無届け移民が増加しており、実質的な人口は 100 万人を越えている。図 3 は、ウラン

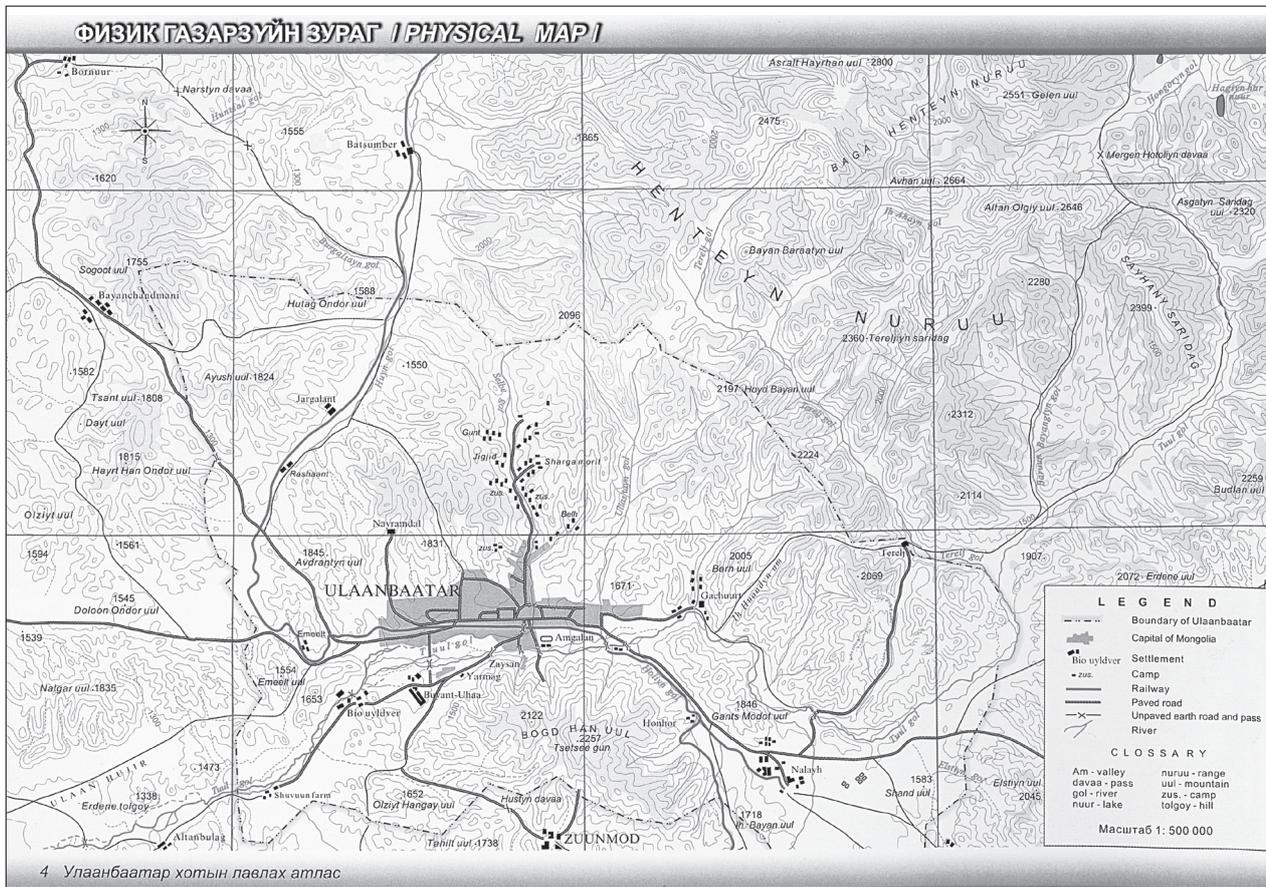


図 1. ウランバートル市の地図 (1メッシュ:3.7km 四方)

バートル市の公式人口の変化である。ウランバートル市は、1960年代初めには15万人の規模であったが、1970年には28万人、1980年には42万人に増加してきた。それ以降も人口が増加し、1990年代の民主化時には58万人になり、それ以降急速に人口が増加した。2003年には85万人に到達している。但し、図3のように貧困層の人口を見ると2000年には約20万人を示し、その増加傾向は1990年以降急速に拡大しており、ウランバートル市への流入人口の増加と連動している。こうした人口増加は、都市人口の自然増加と草原地域からの社会増加によるものである。この人口増加の大きな契機となったのは1990年代初期の社会主義から資本主義への体制移行である。市場経済の成立に伴って都市経済の急速な発展と他方で草原地域と都市地域での所得格差の拡大によって、草原から牧民が就労機会を求めて都市に流入してきたのである。流入してきた牧民たちは、モンゴル遊牧民の伝統的な居住文化である移動式テント（ゲル）を使って定住してしまうのである。また移動の理由は、都市と草原地域の所得格差だけでなく教育機会の格差を解消することも目的となっている。そのため流入人口の年齢は、子どものいる若い世帯が多くなっている。また、数年に1度発生するゾドという冬季の大寒波によって家畜を失い、都市へ流入する人たちもいる。

2) ウランバートルの都市化

前述したように、ウランバートル市の人口増加に伴う都市拡大の方向は、図1のように、河川沿いに東西に広がっている。これらの地域では、中心部の社会主義時代の古い集合住宅と1990年以降の民主化時代に新設された集合住宅が東部と西部に拡大している。最

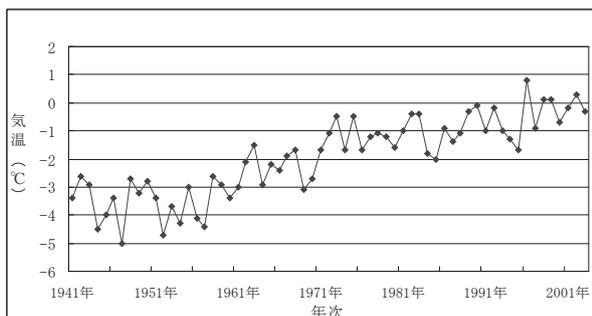


図2. ウランバートル市の年間平均気温の変化

低気温が-30度になるウランバートルでは、暖房設備のある集合住宅が一般市民の居住空間となる。最近の資本主義経済の下で富を得た富裕層のための戸別住宅も、河川沿いの南側に建設されている。こうしたコンクリート製で暖房設備の整った建物群のすぐ周辺に、ゲル集落や手狭なゲルから一歩前進した世帯の簡易の木造住宅が広がっている。高層住宅と低層住宅のコントラストが明瞭な都市景観を示しているのである。図4は、ウランバートル市の流入人口と流出人口の変化である。1990年以降、急速に流入人口が増加していることがわかる。これらのほとんどが草原からの牧民の移住であり、彼らの居住地域は、ゲル集落である。2000年以降毎年1万人以上が流入し、2003年には4万人の流入人口となり、着実に増加している。2001年の調査研究では12万6千人のゲル住民（スラム街）が市内に存在しているという報告がなされたが、その実態は無届流入も多いため正確には把握できていない。

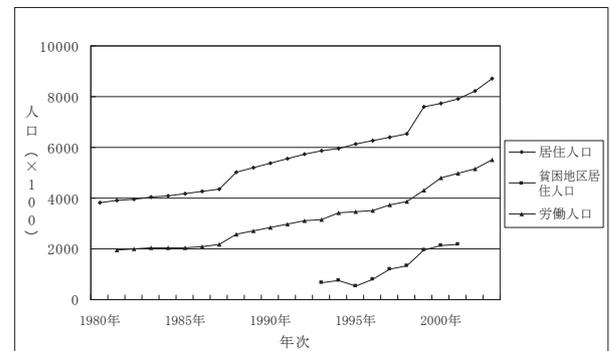


図3. ウランバートル市の人口変化

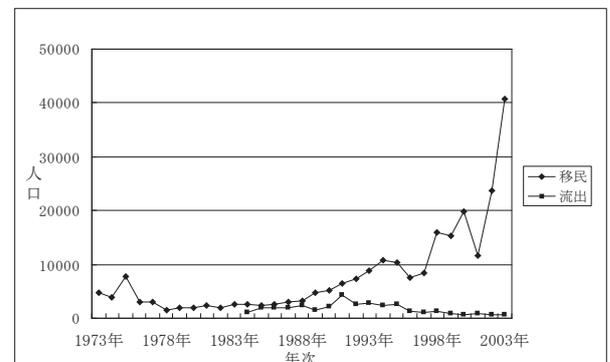


図4. ウランバートル市の流入人口の変化

資料：ウランバートル市統計情報研究局編統計ハンドブック

3. 牧民移動とゲル集落

1) ウランバートルにおけるゲル集落の構成

中心街から北に車を走らせると高層住宅は姿を消し、木造バラックやゲルの住宅が続く。10分ほど走ると、ゆるやかな丘の斜面に造成もせず、丘の頂上に向かって木製の垣根の区画が広がっていく。(写真1、写真2) 垣根の区画の中には、急造ともいえる木造の1階建ての家屋が建てられ、その中に電話ボックスのような形をした木造のトイレがある。広さは60坪(約200m²)～100坪(330m²)程度にである。木造の家が建てられない所では、ゲルが建てられている。電気は後から付けたように無計画に作られた電柱に支えられて電線が伸びている。水は、共同の井戸が設置(写真3)されていて、水くみをして各家に水が運ば



写真1. ゲル集落の拡大(2006年3月)



写真2. ゲル集落(2006年9月)



写真3. 共同井戸

れていく。ウランバートルは、3月中旬の平均最低気温が-16～-21℃である。1月は-35℃にもなるという。ゲルも木造の家屋も石炭ストーブである。ゲルは機密性が高いが、バラックのような木造家屋は、たくさんの石炭を必要とする。幹線道路には、火付け用の薪や石炭を売る露店が並ぶ(写真4)。30kg入りの米袋と同じぐらいの大きさの袋に石炭が詰められ、薪も同じ体積でひとまとめにされている。この量で1つ、700TGである。(1TGは約0.1円なので、70円である。)このゲル集落から、大量の石炭が暖房用に焚かれ、黒煙が空を覆う。拡大するスラムは中心部の北側にあるので、冬の北風に乗って石炭の黒煙が中心部に流れる。住宅地を走る道路は舗装されておらず、雪が降れば凍結し、雪が解ければぬかるみ、乾燥すれば砂塵が舞う。

人々の交通手段は徒歩と乗り合いタクシーである。中心部からスラムまでは、公共バスが走っているものの、多くの人が利用しているのが、白タクともいえるミニバンの乗り合いタクシーである(写真5)。10人～12人がギュウギュウ詰めになって乗り込み、スラムと街を往復する。このミニバンが町にあふれ、運転



写真4. 路上の石炭売り



写真5. ゲル集落の交通手段

も荒っぽく交通ルールを無視して運転されるので、交通渋滞の一因となっている。スラムの終点には、客待ちのミニバンがあふれていた。このスラムの人たちは街のどこに向かうのだろうか？技術もなくあてもなく、農村から出てきた人が収入を得る方法は、乞食か犯罪だが、多くの移住者が働く方法は、物売りである。仕入れ元から仕入れた食料品や文房具などを街のあちこちで売っている。その仕入先が、中心部から南東にある巨大なバザールがある（写真6）。駐車場を入れれば東京ドーム4個分ぐらいの広さで、かまぼこ型のドームが2つ屋根をかけただけの巨大な売り場が2つある。屋外にもたくさんの露店がひしめいている。1区画3坪（6畳ほどの広さ）程度の店がつらなっている。衣類や靴、食品、文具、生活雑貨、食堂、ありとありとあらゆる商品が売られている（写真7）。とにかく商品が安く、品揃えも豊富である。品質はいかにもの安物という感じはするが、その量と種類はあふれるばかりである。衣類や靴は中国製が多い。中国の街角で見かける商品と同じようなものを売っている。ここが、スラムの人々の主な働き場所であると同時に生



写真6. バザールの入り口



写真7. バザールの内部

活物資の調達先となっている。このバザールへの入場料は1人20TG（2円）である。

こうしたゲル集落の拡大は、人口増加に伴う都市問題を生み出すほか、深刻な環境問題も生み出している。第1の問題は、前述した大気汚染である。ウランバートルにおいて一般的な住宅は集合住宅であり、冬場は各家庭にパイプを通してスチーム暖房が供給されている。ところが、ゲル地区ではゲルの中で石炭を燃やして暖を取ることが一般的であるから、石炭を燃やした際に出る煙が市内の大気汚染の直接的な原因となっている。第2の問題は、生活インフラの未整備による衛生問題である。ゲル地区に住む人々の60%~70%は土地を無許可で占拠しているために、その地区では排水システム、ゴミ処理などのインフラ整備がなされず、土壌汚染の問題が懸念されている。

2) 都市のゲル住民

ここでは、ゲル集落のヒアリング調査を基に、ゲル集落に住む人々はなぜ都市に移住してきたのか、また現在生活はどのようにして成りたさせているのかを明らかにする。彼らは、1997年にホボト県という所からウランバートル市へ移住してきた。現在の場所に移住してからの移動はないようだ。ここでの生活環境をみると電気は通っており、水道は共同利用、トイレは敷地内に併設されており、現在一つのゲルに家族6人で生活している。移住場所を現在の場所を選択した理由は、その場所を親戚が市から使用許可を取っていたということによるものであった（図5）。

ここに移住してくる前はホボト県で遊牧民として生活を営んでいた。その頃の家畜構成は、羊100頭、山羊30頭、牛4頭、馬3頭、らくだ3頭というものであり、ウランバートル市へ移住してくる際に一部は売却し、残りは世帯主の弟に預けてきた。遊牧をやめ

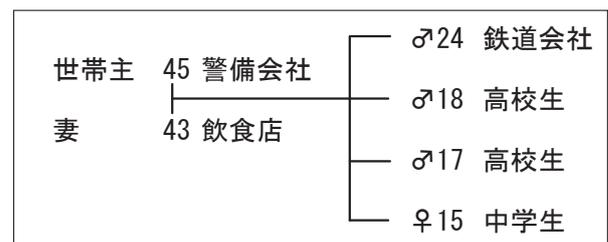


図5. 調査住民の家族構成

て都市に移住してきた直接の契機は、子どもにより高い水準の教育を受けさせるためだという。移住してきた9年前というと長男が9歳、二男が8歳、長女が6歳ということであるから、子どもたちが就学年齢に達する時期に家族総出で都市へ移住してきたことがわかる。(モンゴルの教育制度は一般的に5・4・2の11年制であり、7歳から始まる)

さらに、現在の家族の就業構造を見ると、まず世帯主は警備会社に勤めている。勤務形態は午前8時から次の日の午前8時という24時間勤務であり、その後48時間休業するというものだ。給料は、健康保険などの社会保障費が引かれて手取りで9万～10万T G程であり月給制となっている。妻は飲食店の料理師として働き午前9時から午後9時までの12時間労働となっていて、休暇は原則として日曜日である。給料は大体世帯主と同じ程度だという。また、妻はフェルト刺繍を内職として抱えており、一つのフェルト刺繍で(製作期間は約一ヶ月)100ドルの収入を得ている。このフェルト刺繍は、牧民の頃から自分たちが身の回りで使う日用品を作っていたものだが、2000年からハンドメイドのフェルト教室に通い、そこから材料提供を受けて生産している。刺繍をするためのフェルトへの下書きは妻が飲食店へ働きに出ている間は子どもたちや夫などの家族労働で対応している(写真8)。

この世帯の特徴は、移住の目的が都市の高水準の教育を受けさせることであった。もうひとつの特徴は、内職技術を持っていたことである。この世帯は、平均的な生活水準であるが、決して余剰のある生活ではない。しかし、妻がフェルト刺繍という技術を身につけていたことが家計を支える意味でも大きな役割を果た



写真8. 内職のフェルト刺繍の完成品

していた。もしフェルト生産の収入がなければ世帯主や妻の収入だけでは切り詰めた生活とならざるを得ない。ここでみたフェルト生産に代表されるような編み物技術や刺繍技術は、「手に職をつける」という意味でも大きな意味を持っている。なぜなら、こうした加工技術を持たない遊牧民が家畜喪失に伴う就労機会、教育機会を求めて都市に移住してきた場合は、低賃金の就業機会しか得られないからである。

3) 地方都市のゲル住民

地方都市の事例は、ウランバートルから北へ500キロ離れた、モンゴル最大の銅鉱山の都市エルデネット市のものである。エルデネット市は人口約10万人のモンゴル第二の都市である。この都市の周辺にもゲル集落が形成されている。調査した住民の概要は以下のとおりである。彼らは、エルデネット市から50～60km離れたブルガン県の田舎からわれわれが調査した前日に移住してきたとのことだった(写真9)。まだ越してきたばかりでゲルは簡易形式で建てられていた。現在住居を構えている土地は市から許可を取っており、電気はまだないが、井戸は近所にあるという。この場所を選択した理由については、許可が下りた場所がたまたまこの場所であったというものであった。来年からは木造の家を建てる予定であり、本格的に定住することになることがうかがえた。ここで住宅に関して多少補足すると、スラム街の住居を観察するとゲル、木造、レンガ造りといった住居パターンが確認できる。これは、ヒアリング調査によれば、この住居形態は定住してからある程度資金がたまるとゲルから木造へ、そしてレンガ造りへと立替られるのだという。木造の場合は材料費で80万～90万T Gであり、自分

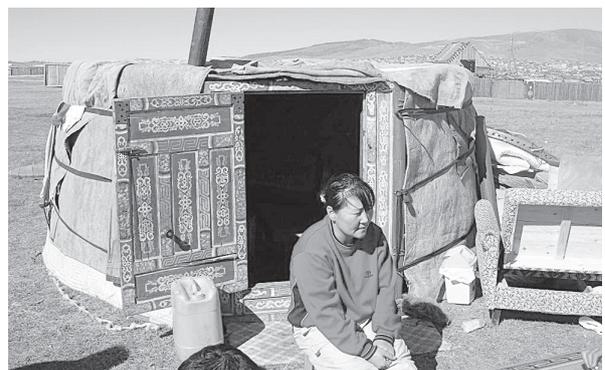


写真9. 移住してきたばかりのため簡易ゲルになっている

たちで立てるのが一般的だという。

移住する以前はやはり遊牧を営んでおり、家畜構成を見ると羊 60 頭、牛 100 ～ 150 頭、馬 10 という規模であったそうだ。移住してきた理由について尋ねると、子どもが市内の学校に入学することが決まったからだということであった。ここでも教育機会という要因が都市へ移住させる動機となっていることが理由として浮かび上がってきた。(しかし、近年は気候変動が激しく、草原の状態も不安定なため遊牧民の間でも仕方なく都市へ移住してくる人々もいるそうだ。) 以前飼っていた家畜は現在、親戚に預けているが(家畜の委託料はないらしい)、子どもの夏休みなどの長期休暇の際は田舎に戻って家畜の世話をする予定ということだ。ここから、ウランバートル市ではなくエルデネット市に移住してきた理由の一端がうかがえるであろう。つまり、この世帯の場合、完全に家畜を放棄してしまっただけではなく、長期休暇などある限られた期間だけ家畜の世話をできるような範囲で移住を選択したとも捉えることができるということだ。また、現在の家族の就業構造をみると、世帯主はもともとエルデネット市で運転手の職を得ており、単身赴任をしていたそうだ。それが子どもの入学を契機に都市へ移住してきたという構図になっている。妻は、移住してきたばかりなので仕事はしていないということだった。

ここで、地方都市に移住してきた住民調査を先のウランバートル市のスラム調査と比較しながらまとめると以下の特徴点があげられる。第1に、どちらの事例でも子ども教育問題が移住の大きな契機となっていることだ。そして、どちらの調査事例も以前営んできた家畜を喪失したわけではなく、経営していた家畜を親戚に預けるといった形態で都市へ移住してきている。第2に、こうした牧民の移住先は中心部から離れた傾斜地、または地方都市の場合は都市的利用がなされていない所に立地しており、こうした場所が不法占拠の対象となっていた。

4. おわりに

モンゴル国ウランバートル市のゲル集落を中心に、その実態を明らかにしてきた。1990年以降急速にウランバートルの人口が増加しており、その要因は草原からの牧民の流入であった。牧民たちは、草原の親戚に家畜を預け、子どもの教育や所得の向上を理由に移動してくる。と同時に親族の都市での居住拠点を獲得することも大きな目的といえる。なぜならば、自分たちの居住拠点に親族の子どもたちが寄留し、都市の教育を受けることも可能となるからである。草原からの人口移動が都市の環境問題や都市問題を生み出す一方で、草原の遊牧民の減少を生み出している。こうしたモンゴルの人口移動の現象が、この国の草原の土地利用に与える影響についての分析は今後の課題としたい。

この調査は、境田清隆代表の科学研究基盤研究(B)「中国内陸地域の砂漠化(荒砂漠化)に関する地理学的研究」を使用した。

参考文献

- 小金澤孝昭(2006)『内蒙古草原地域の草地劣化と退耕
環林政策に関する地理学的研究』科学研究費報告書
蘇德斯琴・小金澤孝昭(2001)「環境教育教材としての
砂漠化～中国内モンゴル自治区の草原劣化を事例
にして～」宮城教育大学環境教育研究紀要第4巻
Department of Statistics, Information and Research
of Ulaanbaatar (2005), Statistical Handbook of
Ulaanbaatar.
Governors Office of Ulaanbaatar (2003), City
Ulaanbaatar Reference Atlas.

